

ヨーロッパ的性格 ニッポン的性格

坂口安吾

青空文庫

ヨーロッパとニッポンが初めて接触いたしましたのは、今から四百年ばかり前のことであります。その当時に、ニッポンの性格とヨーロッパの性格とが引き起こした摩擦とか、交渉とかいうものを私の見た眼から、皆さんにお話してみたいと思います。

具合のいいことに、その当時にニッポンへやつてきました、皆さん御存知のいわゆるキリシタン・バテレンという、あれはカトリックのほうの宣教師なのであります。神父と申しますような人たちが、それぞれ故国へ手紙をやつたり、報告を出したりしていまして、これらが今日残つております。当時の事情を知るために非常に大切、貴重な文献となつております。

ニッポンにも、この当時の事件とか事情とかを書いたいろいろの手記、記録というものがありますけれども、残念ながらニッポン製の資料というものは役に立たないのであります。殆んど駄目であります。

それと申しますのが、ヨーロッパなどの外国人たちの観察の方法と、ニッポン人の観察の仕方とは、本来的に非常に差異があります。ニッポン人はどうも物事を大いに偏つて見る傾向がありまして、たとえば烈火のごとく怒つたとか、ハッタとにらんだとか、そ

んな風に云つてしまつて、それだけで済ましてしまうという形が多いのです。物事をそれらの物事そのものの個性によつて見る、そのもの自体にだけしかあり得ないというような根本的にリアルな姿を、取得しておらないのです。そういうことが、まことに不得意なのです。

でありますから、実例をとつて申しますと、織田信長が本能寺で殺されました時のことを、「信長記」という本がありまして、それに書いてあるのを読んでみますと――

「明智光秀の軍隊はやにわに亀岡から下りて参りまして、本能寺を取り囲んで、ドツとばかり勝鬨かちどきをあげて、弓、鉄砲を打ちこんだ。本能寺のほうでも眼をさまして、中から豪傑連中が飛び出して、明智勢のなかに斬り込んだ。本能寺のうちは、明智勢がたじたじとなりましたが、そのうちにそれらの連中が討死しますと、だんだん寄手の勢いが強くなつた。織田信長までが寺の廊下へ現われまして、片はだ脱いで槍を持ち出して、近づくやつを突き落した。そのうちに矢が片腕に当りましたので、部屋の中央にもどつて来て、火をかけて自殺した」

――こんな風に書いてあるのであります。

ところが、この当時に、この本能寺という寺のあつた所から、約一丁ばかり離れた場所

に、京都に於けるたつた一つのキリストンの教会があつたのであります、この教会におりましたヨーロッパ生れの神父たちは、真夜中に戦争らしい物音に眼をさましたのであります。それからまア、いろいろと避難の用意などをあれこれと致しまして、夜の明けるのを待ちまして、もつともたゞ黙つて待つていたのではありません、尽せるだけの手段を尽してあらゆる方面から情報をあつめたのであります。可能な限りの探査を行つたのであります。全然、落ちついていたわけであります。これらの人々によつて収集されたニュースは、適当にまとめられまして、直ちにそれぞれの本国に報告されたのであります。

その報告によりますと、こういうことになるのであります。――

「明智の勢は、本能寺を取り囲んで、それから本能寺のなかに乗り込んで行つたのではなく、本能寺のほうでは謀反などという嫌疑すらも持つておりませんでしたので、誰も手向つてゆく者がない。どこに一人も抵抗する者もなく、どんどんと這入つて行つて、信長のいるらしい部屋のところまで来てしまつた。信長は顔を洗つて手拭いで拭いていました時に、そこに、先頭にはいつて来た奴が弓を射つた。その矢が背中に刺さりましたので、ぐつと振り向くとその矢を抜きとつて、薙刀なぎなたをとるとしばらくの間戦いました。そうしていると今度は、鉄砲の弾丸が片腕に当りましたので、寝所のなかに這入つて切腹した」――

—という説と、「寝所のあたりに火をつけた」という説と二つあるのですが、その後のことは誰も見ていたわけではありませんから、まるつきり分らないのです。ところが、同じこの事件についての、キリストン・バテレンの連中の報告というのが、実に精確きわまるものなのです。その証拠があるのであります。彼等の報告は今日もいろいろな形式で書物になつて、私たちの手にはいりますから、それをお読み下さるとお分りになるのであります。そういうものと、ニッポン人としては珍らしくリアルな手記を残している一人の人間の書いていることとを比較されると、私の申すことが御諒解になれると思うのであります。

ここで私の申します、リアルな記録を残した、例外的な一人のニッポン人というのは、明智方として、本能寺へ寄せた軍勢中の大将の一人で、ホンジョウ・カクエモンという男のことなのであります。彼の覚書によりますと、信長の死の前後は次のようになります。これは手記でありますから、この部分もごく簡単であります。――

「本能寺のなかへ乗り込んだ時には、相手のなかで誰も手向つて来る者がない。或いは自分を仲間だと思っていたのか、自分が這入つていつても手向いする者がなかつたのか。それだからと云つて、寝ている者もなかつたし、氣を配つてみたけれども鼠一匹すらも姿を

見せなかつた。せめて二、三人でもと思つたが、おどり出して抵抗して来る者もなかつた。そもそも抵抗というもの有何ひとつ感じることなく、信長の寝所へゆきついたのであつた」

こんな風なことが誌されております。

この一例でも分つて頂けると思うのですが、すこしも他に煩わされることがなく、自分自身の体験そのものを、明確に書き上げた日本人の手記というものは、滅多にないのであります。これなどは實に特別な、特殊の例なのであります。殆んど、いや全ての者は、物事の本態を見るということを忘れてゐるのであります。いつでも他人の思惑が考えられていまして、独立の個人の自由な考え方とか、観察方法とかは許されていないし、許されなければブチ破つてやろうという人物はいなかつたのであります。ニッポン人にとっては、毎時でも、もつと一般的な、嘘があつてもかまわぬから一般的でさえあればいいというような調子がお得意なのであります。相も変らず、ハツタとにらんだとか、烈火のごとく憤つたとかいう云い方、そういう方式、どうにでもなるというような一般的な観察で片づけてしまおうとする考え方、従つてそのような手記、記録がぞくぞくと現れているのであります。むしろ、そればかりであります。

このような観察の仕方にくらべますと、ヨーロッパ人たちの物事の見方というものは、個々の事物にしかない、それぞれのその物事 자체にしかあり得ないところの個性というものを、ありのままに眺めて、それをリアルに書いておりますので、それだけに非常に資料価値が高いのであります。そのリアリティというものは尊敬すべきであります。

今日、私たちニッポン人というものが、外国のいろいろな物事の真似をする時には、この意味での外国の性格、そうしてニッポンの性格というものをよく知り、殊に申したいのは、ニッポン人にはこのような性格上の欠点があるということを、よく知つておく必要があるということであります。

併し、それは今日の話でありまして、この話の当時にありますては、今私が申したような、個性に即した物事の見かたとか、観察の仕方というようなものは、驚くべきことには、婦女子の感覚だと云われていたのであります。そして、貶^けなされていたのであります。それはどういうことかと申しますと、その当時の考え方では、男子たる者は、もつと大ざっぱに物事を考えなければいけないので、こういつた細かい物事にはわざと眼をふさいで、気がついていても気がつかない振りをするほうが立派なのだ、という人生觀がずーっと流行していたからであります。それが絶対的な権威をもつたニッポン的的人生觀であつたわけ

であります。こういうバカバカしい事が、ニッポン人一般の、物事の観察法、世界観といいますか、人間觀察というものを大変に遅鈍にさせまして、実態にふれることのない、抽象的な考え方をはびこらせることになつたのであります。抽象的にならざるを得なかつたのであります。弱いのであります。

前にも申しました通りに、ニッポンと西洋とが接触しましたのは四百年ほど前のことでありまして、キリスト紀元の一五四三年、十六世紀、ニッポンで申しますと天文十二年であります。ちょうど、足利末期の戦国時代の始まりかけた時であります。但しこの時は、ヨーロッパ人は初めからニッポン本土へ来ようと思つていたのではありません。シナの船が、暴風に吹き流されて、種子ヶ島へ漂着したのであります。そのシナ船には、ポルトガル人が三人乗つておりました。

この三人のポルトガル人が鉄砲を持つておりました。この時にニッポンに初めて鉄砲が伝つたのであります。これが例の、われわれが種子ヶ島と云つておる、あれであります。これはまた、ヨーロッパとニッポンが接触いたしました初まりなのであります。

御存知のマルコポーロであります、彼の手記に書いてあるニッポンは、ジパンングということでありまして、黄金で出来あがつておる国だということになつております。そのよ

うに彼は報告しておるのであります。この報告によつてニッポンへやつて来る人間が、大変に多くなつたのであります。そういう志を持つヨーロッパ人が急激に増加したのであります。

けれども、皆さん御存知のいわゆるキリスト教というものが、このニッポンへ渡来いたしまして、そして、本当の意味でニッポンと外国とが政治的に接觸いたしましたのは、それから六年ほど経ちました一五四九年の、七月十五日のことであります——これはキリスト教の歴史という点で考えますと非常に大切な日なのであります——、この日に、フランシスコ・ザヴィエルという人物が、ニッポンの土地に初めて到着したのであります。

さて、この事実についてであります。それは、この時に初めて日本の土をふんだ、このフランシスコ・ザヴィエルという宣教師は、当時、ヨーロッパにおきましても、まれに見る高僧なのであります。ジエスイットという宗派は、御存知のとおり今日でも残存致しているのであります。この宗派の開祖であるロイラーなる人物の最も親密な協力者であり、また最も信頼された同志であり、自他ともに許した最高の学識を有した高僧であります。とは申しますものの、このジエスイット派と申しますのは、十六世紀の初頭にいたつて力

トリックが腐敗いたしまして、それに対抗しそれを改革しようとして、例のマルティン・ルーターが新教（プロテスタント）を樹立した、その結果としてカトリックの名声が地に墜ちました時に、こんなことでは不可以といふので、眞のカトリック精神、根本的なものへ還つた意味でのカトリックの精神を実質的に回復させなければならぬというので、イエス・キリストの弟子という標語を押し立てて組織されたところの、非常に強力な同志的な結合をもつてゐる宗教団体でありますて、貧乏、童貞、服従という三つの徳目をモットーといたしまして、人間個人の一切の私利とか私慾とかいうものを捨離して、神に仕えるという宗教であります。この宗派のこのモットーは大変に厳しいのでありますて、戒律というようなものが厳しいものであるなかでも、このジェスイット派は、特に厳格な戒律を守るという誓言によつて成立した宗派なのであります。この宗派が確固としたものとなりましたのは、フランシスコ・ザヴィエルがニッポンに到着しました時の九年前、すなわち一五四〇年に到りまして、初めてのことなのであります。

もともと宗教と申しますものは、長年月にわたつてつづいておりますと、どうしても墮落いたしますのですけれども、その例はまことに多いのであります、このように宗派の結成の初期といいますものは、何しろ非常に熱狂的なのでありますて、従つてニッポン

へ初めて参りましたフランシスコ・ザヴィエルは前に申したとおりであります、その後にいたつて続々としてやつてきました神父たちも、いざれもヨーロッパにおきましては、最も高徳な僧侶である、ということを記憶しておかなければなりません。

これらのこと頭の中へ入れておきますと、ニッポンがその当時に於てヨーロッパの影響をはげしく受けまして、殊に精神的には驚天動地というような感動を受けた面がありましたのも、たゞ今申すとおりに、ヨーロッパでも振りぬきといつた神父たちがそろつて、ニッポンへやつて來ていたという、特殊な事情があつたからなのであります、彼の地の宗教事情はともかくとしても、ニッポンにとつては、これは望外の仕合せであつたのかも知れないのであります。

ところで、このフランシスコ・ザヴィエルという人物であります、この教父がどうしてニッポンへやつて來るようになつたかと申しますと、実はザヴィエルはインドで布教するため東洋へやつて來ておつたのであります。ですが、インドは御承知のとおり熱帯地方であります、インドの人間という者は、非常な怠けものであります、熱い熱いでどうも仕方がないのですから同情しますが、新しい知識などを求めようという意欲はまず持つてないと云つてよいのであります。もう一つ、インドにはごく古くから伝つてゐる宗教

が根強くはびこつていまして、その力はひろいので、新しい宗教を受けつけることを為な
いのであります。

さすがのフランシスコ・ザヴィエルも、この有様で、悲観しておりますと、たまたま一
人のニッポン人が彼のところへやつて来たのであります。これは弥次郎という人間であります。

この弥次郎が、どうしてインドへやつて来たのかと申しますと、彼は鹿児島の人間であります。或る時、人を殺しまして、役人に追われて、お寺へ逃げこみました。何んとかして助かりたい。ところが、彼はポルトガルの一商人と友だちでありますので、そのポルトガル商人に頼みこみまして、鹿児島の港へポルトガル船が碇泊しました時に、うまく乗り込み、海外へむかつて脱走しようという手はずをととのえたのであります。その商人から紹介状をもらつて、港へ出かけたのですが、ポルトガルの船が二艘来ておりました。この二艘の船の船長は、フランシスコ・ザヴィエルを非常に尊敬していたのであります。船長は弥次郎の話を聴きまして、大いに同情を催したのであります。船長は、弥次郎をザヴィエルに紹介してやろうというので、船へ乗せて、マラッカへ連れて参りました。

弥次郎はザヴィエルに会いまして、その人格に傾倒したのであります。ザヴィエルの

ほうでも、弥次郎を見ましたところが、今まで眼の前に見ていた熱帯の土人には見ることの出来ない知識、記憶力、礼儀正しさ、を認めただけでなく、その上にいつまでも何かを知ろうとする真面目な努力のひらめきがあることが分りましたので、ニッポン人という人間がこのような人種であるのならば、このニッポンこそは、自分の伝道すべき地域であると考えたのでありました。ザヴィエルは、この弥次郎という人間が、実にどうも誠心誠意キリストの教えを守るので、とても吃驚^{びつく}しました。彼は弥次郎を、インドのゴアという所にあるキリスト教の学校へやつて勉強をさせたのでありましたが、弥次郎はもともとポルトガル人の友だちを持つていましたし、ゴアへ参りましても、普通のニッポン人にくらべますと驚くべきほど早く、たちまちにしてポルトガル語が上達いたしました。また、キリスト教の趣意を理解することにおきましても、長足の進歩をしたのであります。そのゴアの学校でも並ぶ者はないほどの、最高の学者になつたのであります。

こんな具合ですから、ザヴィエルは、弥次郎に對して絶大な信頼をよせていましたのですが、どうも併しこのことの為に、今日になりましてもニッポンの歴史家たちは——主としてキリスト教の歴史を書いておる歴史家のことを云うのであります。そして大体に於てはキリスト教徒のほうが多かつたのでありますけれども——ザヴィエルを、この上も

なく信頼しておりましたので、ザヴィエルの説をもそのままに呑み込むことが多く、弥次郎の人格をもまた非常に高く買つておるようでありますけれども、われわれ文学にたずさわつております者の眼から見ますと、どうも、そういう風には思えないのです。

この弥次郎という青年は、いろいろな点から調べてみましても、どうも、その判つきりした身分とか身許とかが、分らぬのであります。明確なところが少いのであります。ポルトガルの商人と親しい人間であつたことは確からしいのでありますけれども、ザヴィエルがニッポンの事情について種々と聽きました時にも、宗教のことなどについては、まるで何も知らなかつたのであります。従つてニッポンの仏教についてなども何も知らない、無知そのものでありますので、ザヴィエルが非常にがつかりしたということが、ザヴィエル自身の書簡のなかに書かれておるのであります。ところで、問題がひとたび貿易に関係して参りますと、この弥次郎が実に正確な知識を持つてゐるのであります。このことから判断してみまして、彼が多分商人の出であつたろうということが分るのであります。年は三十五、六歳であつたということであります。

思うにこの人物は、非常に世慣れた遊び人でありますて、いろいろと変つた境遇に順応することの出来る処世の術を、かなりよく心得ておつたのだろうと思うのであります。で

すから、郷に入つたら郷に従えというわけで、ザヴィエルに会いますと、彼はこの教父に順応するために多いに努めたのでしよう。また、彼がザヴィエルに傾倒したというのは、本当のことであらうと思いますが、それは、人を殺すぐらいの人間というものは、非常に人に惚れっぽいのでありますと、その点からしても彼がザヴィエルに参つたろうということは肯けるのであります。弥次郎は、キリスト教の教えのなかで何に一番感動したかと申しますと、それはキリスト受難に対してなのでありますと、思うにこの男は一種のボヘミアン的性格を持つていたに違いないのであります。このような弥次郎がキリストの受難に心を傾けたということ、その事実だけは、一つの事件として肯けるのでありますが、弥次郎はキリスト教徒になつたのではないであります。

初めのうち、ザヴィエルがそばにおりました間は、眞面目な顔をしておりましたけれども、間もなく彼はグレ出したのであります。後になりますと、例の八幡船（はんせん）という、半分は海賊みたいな、半分は貿易をやるような船に乗りこみまして、シナへ這入りこんでいつてニンポーという所でシナ人に殺されたという記録が残つております。

こんな人間でありますだけに、この弥次郎という男は非常に礼儀正しいのです。もともとニッポン人というものは、実際は礼儀正しいところがあるものなのでありますけれども、

元来よい人間というものは、むしろ却つてザックバランなものなので、そんなに糞眞面目に人と応対などはしないものであります。弥次郎は、おそらくはザヴィエルに対して、何事につけても非常にしかつめらしい態度で応待しておつたんだろうと思ひます。ザヴィエルはそれを大変に信用しまして、おそらくニッポン人というものについての最初の観念におきまして誤つておりましたので、ニッポン人を見る眼に誤解が起つたんだろうと思われる節があります。

ここにまた面白い事があるのであります、私がなぜ弥次郎をそんな人間であるかと申しますかというと、たとえばザヴィエルが――

「ニッポン人は、私が行つて布教をしたら、すぐにキリスト教徒になるだらうか?」――
という風に弥次郎にたずねましたところが、弥次郎が答えまして――

「いや、ニッポン人というものは非常に理屈っぽい国民で、すぐにはキリスト教徒にはならぬ代りに、道理というものを飲みこめば、改宗します」

――という風に答えております。こういうところは、ニッポン人観というものが大いに正確でありまして、仏教の知識が何一つなかつたと思われる弥次郎にも似合わない、人間観察の正しさを見せております。

また、ザヴィエルがポルトガルの船に乗つてニッポンに行こうと申しました時に、弥次郎はそれに答えて、――

「ポルトガルの船乗りというやつは非常に好色で、ニッポンの港へやつて来てもとても評判がよくないから、あんな船へ乗つていつたら、キリスト教の名声を落します。ですから、シナの船に乗りなさい」

――と云つて、シナの船に乗せたということ드립니다。こういうことも、ニッポンの歴史家は、弥次郎がこんなことを云つたことは一種の伝説だらうと軽く片づけていますけれども、私はそこに弥次郎の本音があるのだらうと思います。弥次郎は、非常に遊び的な風格を持った人間でありますから、そういう船乗の生活というものがニッポン人に反撥されるということは、非常によく、実感をもつて、知つておつたのだと思われるのです。

この弥次郎に伴われまして、フランシスコ・ザヴィエルはニッポンに参つたのであります、ニッポン人は大歓迎をいたしましたのであります、初めのうちは押すな押すなの繁昌というわけであります。何しろ七人ほど黒ん坊と一緒に連れて参りましたので、その黒ん坊を大変珍らしがつてニッポン人が押しかけました。

サツマの殿様の島津さんに謁見いたしまして、布教の許可を受けることができました。この時にザヴィエルが、鹿児島のフクソウ寺のニンジという高僧と友だちになりました。このフクソウ寺というのは、鹿児島の島津家の菩提寺だそうで、当時百人ほどの禅僧がおつたと申しますから、非常に大きなお寺、サツマで最大のお寺であり、そこのニンジという禅僧は、サツマきつての傑僧であつたのだと思います。

ザヴィエルは、このお寺を借りまして、キリスト教の説教を始めました。

フランシスコ・ザヴィエルは、フクソウ寺の傑僧ニンジと、毎日のように顔を合せていましたし、いろいろなことで友達になつたのであります。が、ニンジとは種々の話題をつかまえて話をしております。それが記録みたいなものに残つております。

ザヴィエルが或る日、フクソウ寺へやつて行きますと、百人ばかりの坊主が坐禅をやつておるところでした。これは変つた風景に見えたことあります。

ザヴィエルは、

「あれは、一体、何を為ているのですか？」

と聞いたのであります。

ニンジは、

「あゝ、あれですか、あれは瞑想しているのです。目下、苦行をしているのですよ」と答えたのであります。

これがザヴィエルには、なかなか合点が行かない。

「瞑想と云つたつて、あんなふうなことをしていて、そもそも、何を考えているんですか？」

と聞かざるを得なかつたのであります。

この問いを耳にすると、ニンジはにつこりと笑いまして、

「いや、あの連中のことですから、どうせ碌なことは考へてゐるわけがありません。おおかた、明日の御布施がどのくらい集まるだらうとか、出かけて行つた先きの檀家で、どんな料理が出るだらうとか、そんなことをでも考へてゐるんでしょう。大したことは考へていませんよ」

と、いうような返事を与えたのであります。

この答えはまことに象徴的なものであります、禅宗の坊主としては、なるほど云いそうなことです。尤もな話なのであります。ニンジといふこの坊さんが、当時のいわゆる傑僧であり、また事實上でも高僧と云われてゐるような人物でありますだけに、この

ような言葉には意味があるのであります。大体が、禅というものは人間の持つていてる人間性、その全てのものを、そのままに肯定する、というところから始まっているのであります。ニンジも、人間が行動するところのピンからキリまでを肯定する、肯定しようと努力するのであります。彼等にとつては、この人間性の肯定ということが、そもそもの出発点なのであります。

禅はこのように考えておりますから、例えば人間の強さも弱さもそれらをとにかく全部的に肯定してしまう。その上で、その肯定という基本的努力の上で、自分の自分一個の安心の道を講ずるのであります。安心の世界を見出そうと努めるのであります。

他人というものには構わずに、自分だけの悟りを求めるというのが禅の建前なのであります。が、それだけに逆にまた他人に対しては寛大な態度をとるのであります。一口に云えば鷹揚になり得るのであります。

ですからニンジは、しがつめらしい顔をして坐禅を組んでいる、修行中の僧侶たちが、その今まで行い澄ました境地にいるのだ、というふうには、云い得なかつたのであります。たとえ彼等が人間本来の弱さからして、どんなに俗なことを考えていたにしても、それはそれとして咎めるべき筋合いのものではないと考えてはいるのであります。ごく寛やか

な見方をしている訳であります。そこで、そういうことを云つたのであります。

すると、これを聞いたザヴィエルのほうは、非常にびっくり致しました。日本の坊主といふものは、苦行の最中にも、宇宙とか神とか真理とかいうようなものることは一寸も考えずに、瞑想の間にあつてお金のことや料理のことを考えているのである、というようなことを直ぐに本国へそのまま報告した、ということが記録に載せられております。

また或る時に、ザヴィエルがニンジに向いまして、

「貴方は一体、年齢が若い頃がよろしかつたか、年をとつてからのほうがよろしいか？」
ということを聞いたことがあります。

ニンジはそれに答えまして、

「いや、若い時のほうがよかつたですね。若い時には元氣があるし好きなことも出来たりするし……」

と云いました。

こういつた問答があつたのであります、ザヴィエルは続いてこんな質問をしているのであります。――

「それではですね。今、一人の船乗りが船に乗つて、Aの港からBの港へ行こうとしてい

るとする。そういう時に、彼が元氣に任せて荒海へ乗り出して暴風にもまれて行くのがよいか、それとも何処かの港へまず近寄り、そこで段々に港から港へと伝わつて行くほうがよいか、どちらがよいだろう?」

これを聞くとニンジは笑い出してしまいました。そして答えた。

「ソリアそんなことは極つていますよ。云うまでもありませんよ。港を目指して行くのがいいです。港というものが判つきりしておつて、自分が歓迎されるということが分れば、誰だつてそこへ行きます。けれども、私は、私の船がどこへ行くのか知つていないんです。自分の行く先が分らないのですから、貴方の云うようなことを聞かれても、私には返事が出来ませんよ」

こんな答だつたのであります。

ニンジという人は、非常にザヴィエルを尊敬いたしておつたのです。それからまたカトリックにも大いに傾倒いたしたのであります。そして自分もカトリックになろうと思つて、大変に苦悶いたしたのであります。

ニンジの帰依しておりました禅宗というものを考えてみますと、この宗教は、人生をそのまままで肯定して、その上で自分一個の悟りをひらこうという目的で、坐禅などをいたし

まして、観念だけの上で安心をはかろうといったすのであります。死生の大悟などと云いまして、われわれが見ますと、禅の高僧などといいますと、如何にも悟りきつた人間であるようであります。高僧であればあるほど、そういう自分自身の悟りが未熟であることを知つておるのだろうと思ひます。そういう悟りの場に於ても、仏教には実践がないのでありますから、具体的な手がかりというものはないのです。自分が何をしておるか分らないのであります。

ところが、ザヴィエルのほうは、貧窮ということを第一のモットーといたしまして自身の全生涯をそれで計つております。そして、他人の幸福のためにすべてを捧げて生きようというふうに、彼の生涯はそれにかかっているのであります。

そういうふた、実践の目標の判つきりしている宗教の前へ出ますというと、禅宗の如き宗教は、全然意味をなさないのであります。自分自身が高僧であればあるほど、悟りの内容の空虚さが分つて來るのであります。その点でニンジは非常に苦しかったのであります。ザヴィエルが帰国しました後で、彼の弟子のアルメードという布教師が來たのであります。が、そのアルメードに向つて、ニンジは、

「自分は禅僧としての地位と名望のようなものがあるので、公然とキリスト教徒になるこ

とは出来ないが、どうか自分に洗礼をさすけて貰えないだろうか。そして、自分は殿様の菩提寺の坊主をやっているのだから、殿様の死んだ時には、自分としては、お寺へ葬らなければならぬ。それは仕方のないことなのだから、そいつだけはどうか勘弁して呉れなかか」

というようなことを云つて頼んでいる。

そうするとアルメードは、

「それはいかかん。貴方は、名譽とか地位とか、そのようなものは、すべて捨ててしまいなさい。すべてを捨てなければ、洗礼を授けるわけにはゆかない」

と判つきり答えて います。それでとうとう、ニンジは洗礼を授けて貰えなかつたのであります。アルメードは帰国し、再来し、さらに三度目にサツマへ参りました時には、ニンジは死んでおつたのであります。死ぬ時に、洗礼を受けないで死ぬのはまことに残念だ、という遺言のあつたことをアルメードが聞いていることが、伝わつております。

この禅僧とカトリック僧侶との交渉は、もう一つあるのであります。フランシスコ・ザヴィエルは、ニンジに会つてから後に豊後ぶんごへ行きました。そして、フカダジという禅僧と会つて いるのであります。この時に、フカダジは、ザヴィエルの顔を見まして、

「あなたは何処かで見たことのある顔ですが、如何がですか、私の顔に見覚えはありますか？」

と聞いたのであります。

それを聞いて、ザヴィエルはびっくりしました。一度もこのニッポン人とは会ったことがない、従つて顔を見たことがないのでありますから、驚くのも無理はありません。そこで次のように答えたのであります。

「いや、あなたの顔は見たことがありません」

この答を聞いて、フカダジは大笑いをしたのであります。そして自分の寺へちょうど来ていた、ほかの禅僧のほうを向きまして、

「この人は、おれの顔を見たことがないなどと云うが、大変な嘘つきだよ」

というようなことを云つたのであります。話しかけられた禅僧もフカダジの云うことが分つたような顔つきをしていましたが、ザヴィエルには納得がいかないのであります。これは納得のいかないのが当然なのであります、ザヴィエルは、

「これはおかしなことを聞くものだ。私は曾つて嘘というものをついたことがない。今も嘘をついた訳ではないのだ。どうして、私を嘘つきだなどと云うのです」

となじつたのであります。

フカダジはそう云われて、こんな答をしております。

「あなたは、そんなに白っぽくれていられるけれども、今からちょうど千五百年前に比叡山で、私のために金を五百貫見つけて呉れた商人というのが、あなたじやありませんか。それを忘れて貰つちや困る。それともあなたは、ほんとに忘れたのですか？」

こんな言葉であります。

これは、そもそも禅問答なのであります。

ザヴィエルのほうは、そんなことは頭のなかに初めからはいっていない。禅問答の要領などというものは、御存知ないのであります。これは知らないのが当然であります。まるつきり問題になつていない。ですから、このフカダジという坊主を、大変な出鱈目をしねる奴だと思つたのであります。そこで、

「あなたは一体、幾歳になるのですか？」

とフカダジに聞きました。

フカダジは答えて曰く、

「私ですか、私は五十二才です」

すると、ザヴィエルは、

「五十二才という人間が、千五百年前に、比叡山で金を貸すことが出来るということは、おかしいではありませんか。そんなことはあり得ない。あなたは、どうしてそんなことを云うのですか」

と問い合わせたのであります。

これには禅僧もすっかり参つてしまつたのであります。

つまり、禅には禅の世界だけの約束というものがあるのであります。そういう約束の上に立つて、論理を弄しているものなのであります。すべては、相互に前もつて交されている約束があつて始めて成り立つ世界なのであります。

例えば、「仏とは何ぞや?」と問いますと、

「無である」「それは、糞搔き棒である」とか云うのです。

お互いにそういう約束の上で分つたような顔をしておりますけれども、それは顔だけの話なんであります。分つて いるかどうかが分らないのであります。

ですから、実際のところは、仏というものは仏である、糞搔き棒は糞搔き棒である、というような尋常、マツトウな論理の前に出ますというと、このような論理はまるで役に立

たないのであります。そして、このような一番当たり前の論理の前に出来まして、それを根本的に覆えすことの出来る力がどんなものだか、どこにあるかと云いますと、それは実践といいうものと思想といいうものが合一しておるところにしかないのです。

ところが、このような生き方は、禅僧にとつてはまことに困難なのです。それで、禅僧といいうものは、約束の上に立つておる観念でだけものごとを考えているばかりでありますて、実践がない。悟りといいうようなものを観念の世界に模索しておるのでありますから、智力といいうものに頼つてはいても、実際の自分の力なるものがどのくらいあるのか、分つておる人間はいないのであります。ですから、カトリックの坊さんのように、実践といいうことに全べてを賭けておる宗教家、その実際的な行動の前には、禅僧は非常に脅威を感じるのであります。自分の実力のなき、みすぼらしさを感じるわけであります。そうして、禅宗を信じる者が、僧侶でありながらカトリック教へ転向するということが、大いに流行したのであります。それは、今日、われわれが想像いたしますよりも、遙かに多数なのであります。これは今日から見ますと驚くべきことではありますけれども、事実なのでありますて、それは記録に残つておるのであります。

このフカダジとの問答などがありましてから、ザヴィエルは鹿児島を去つて山口へ行き

ました。

山口で布教をいたしましてから、さらにザヴィエルは京都へ行つたのでありますけれども、その当時の京都は、戦争のまつ最中でありますて、一体ニッポンという国の主権がどこにあるのだか、それが分らないという目茶苦茶な状態にあつたのであります。これにはザヴィエルもまごついたのであります。併し、宣教師一流のしつっこい、熱心な探索によりまして、ようやくのことで、足利将軍の逃げまわつてゐる姿を見つけ、つかまえて、ニッポンに布教を許してくれるようになると頼んだのであります。こいつは当時にあつては大変な仕事であつたであります。とにかく、ザヴィエルはそれをやつてのけたのであります、こんなところにもカトリック僧の実践力をうかがうことが出来るのであります。

ところで、このザヴィエルの布教の許可の願いに對して、足利将軍のとつた態度というのがはなはだ妙なのであります。ザヴィエルはその時に乞食みたいな恰好をしておりました。一見したところ、如何にも見すぼらしい僧侶でありますて、どうもこれが高僧とは思えないのであります。これには将軍ががつかりした。ですから将軍のほうは、

「お前は、おれに對してそういうことを頼んでいながら、そもそも贈り物というものを持

つて来ているのか？」

と問いました。ザヴィエルは、

「贈り物は山口においてあります。ここまで、あまり長い旅行だつたものですから、持つて来ていな」

と答えたのであります。将軍はそれを聞くと、

「贈り物がなければだめだ」とはねつけたのであります。

ザヴィエルは、こう云われて、諦らめてしまいまして、山口へ帰つたのであります。ザヴィエルはそこで考えました。——もう将軍に会つても、こんな混乱した時代じや意味がない、会つたつて無駄だ。贈り物も将軍なんかにはやらない、山口の殿様にやつてしまおう。——

ザヴィエルは贈り物を山口の殿様に呈上することに極めましたが、前に将軍にあつて懲りたことがありますから、今度は身なりに気をつけました。

きらびやかに盛装をいたしまして、山口の殿様に会い、贈り物をすると、殿様のほうではその威容に打たれまして、尊敬の念をおこしました。そうして直ぐに、布教の許可をもらうことが出来たのであります。盛装と贈り物がモノを云つたことになります。

それから、ちょうどこの頃のことであります。例の豊後と申す土地へ、ポルトガルの商船が一艇やつてまいつたのであります。もつとこまかく申しますと、豊後の府内というところの直ぐそばにある白杵（ウスキ）と申す所へ参つたのであります。

このポルトガルの商船のなかで、東洋の布教師であるフランシスコ・ザヴィエルが山口に来ているという話だから、一つ呼ぼうではないかということになりました。使いの者の言葉を聞いて、ザヴィエルが白杵までやつて参りますと、船のほうでは、それ東洋布教師が来たのだ、というわけで、船中の全員がそろつて盛装して出迎えに行つたのであります。一方、ザヴィエルのほうはどうかと申しますと、いつものとおり乞食に似たような姿恰好をいたしまして、馬へもカゴへも乗らずに徒步でやつて参ります。それだけならまだいいのであります。ザヴィエルは、旅の途中で熱病にかかりまして、身体に熱はあるしだるいしという訳で、フラフラしながらやつて来たのであります。

みんなが、

「どうか、馬に乗つて下さい」

と云つてすすめても、云うことを聞きません。仕方がないから出迎えに來た盛装の連中も、みんな馬に乗つていましたのに、わざわざ降りてしまいまして、そうしてザヴィエル

の後からぞろぞろと隨いて参ります。そうして、いよいよポルトガルの船の碇泊をしております所まで参りますと、六十三発の大砲をぶつ放しました。

白杵の城内では驚きました。そら、ポルトガルの船が海賊と戦争を始めたというので、あわてて兵士をくり出しまして、あわてて救援に参つたのであります。駆けつけて行つて聞いてみると、案に相違して、今、高僧が来着したから、礼砲を打つたのだという話であります。駆けつけた連中は、非常に吃驚りいたしまして、帰つてそれを城中へ報告します。

白杵の殿様はそれを聞いて、そんなにみんなが尊敬している高僧ならば、ぜひ会いたいものだというので、また使いが飛んで、ザヴィエルは白杵の殿様に会うことになりました。

この殿様というのが、大友義鎮よしげん、後に宗麟そうりんと名を変えた人であります。この対面の時というのが、実に大変なものでありますと、ポルトガル商船の一行は、豪華版をひろげたのであります。

まず行列の最前列には、楽隊がずらりと並び、その後には金モールや銀モールの美しい、凛々しい服を身につけたポルトガル人が騎馬で、並んだのであります。次ぎにはザヴィエルが乗物に乗りまして、またその後には船長が土産物を沢山に盛りあげた姿で、乗り込んで参りました。

この土産物を差出して、謁見ということになつたのであります。その威儀の堂々たるところに、大友宗麟は感動してしまいまして、直ちにキリスト教の布教を許したのであります。それだけではなく、この様子を見て、即時その場で改宗する者まで出て来ました。

この時ザヴィエルが約一時間ぐらいの説教をやつておりますと、その短い間にどんどんと改宗者が現われて参つたのであります。これはちよつと驚くべきことであります。その後もキリスト教の伝播は非常に早かつたのであります。が、とにかく、この最初の時の早さというものは大変なものであります。

そこで、ニッポン人は、威風堂々として、意氣の盛んな儀容を示さなければ、信用もしなければ、尊敬もしてくれない。そして、^{いんもつ}音物をやらなければ、贈り物をしなければうまくゆかない。このようなことを悟つたのでありますが、こういうことは全部、本国へ云い送つて いるのであります。

また、ニッポン人は非常に文化が進んでおり、知識慾が旺盛であり名譽を重んじ、寛仁大度である、非常に誠実な国民であるけれども非常に好奇心が強い、とも云われております。何か珍らしい物をもつて行けば、ニッポン人の好奇心をそそり、魅力となるであります、黒人でも一緒に連れて行つたらよかろうなどと書いた手紙などもあります。

或る時、ポルトガル人がこのニグロの一人を信長のところへ連れて行きました。信長はこのニグロを見て吃驚りいたしました。信長という人は非常に理智的な人であります。ニッポンには珍らしくらい、現代的な知性を持っていた人物であります。これは嘘だろうというので、裸にしまして、ふんどしまで取らして、手で身体を触つてみました。どうしても分らない。今度は、お湯で洗わしてみても色が落ちない。こりやア本物だというので、一緒に連れて来た僧からこのニグロを譲りうけて、これを自分のお茶坊主みたいにして使っておつたそうです。

これはニッポンの記録にも残つておりますし、また本能寺の変の時には、このお茶坊主が刀を抜いて戦いまして、本能寺が落城いたしますと、今度は信長の子供の信忠の二条城に行つて、明智勢を向うにまわして、戦いました。明智勢は彼の刀をもぎとり、投げ捨てて、お前なんかは殺さないと云いました。そこで捕虜になりまして光秀のところへ連れて行つたのですが、ニッポン人ではないから勘弁してやるということで、教会のほうへ帰してやつたそうです。その記録は今日も残つております。

どうも、尻りきれとんぼですが、時間が参りましたので、結論がありませんが、この辺でやめておきます。

——歴史に関する或る講演・終——

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 07」筑摩書房

1998（平成10）年8月20日初版第1刷発行

底本の親本：「歴史小説 創刊号、第一巻第二号」

1948（昭和23）年10月1日、11月1日発行

初出：「歴史小説 創刊号、第一巻第二号」

1948（昭和23）年10月1日、11月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくつ
てあります。

入力・tatsuki

校正・oterudon

2007年7月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) に作られ

ました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

ヨーロッパ的性格 ニッポン的性格

坂口安吾

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>